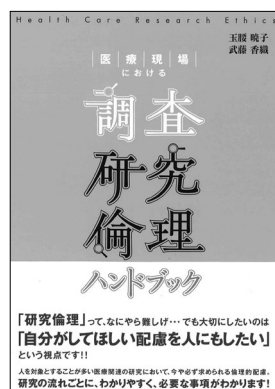


『医療現場における 調査研究倫理ハンドブック』 研究倫理を考えることは 研究を精錬すること

著：玉腰暁子・武藤香織／定価 2,100 円 (本体 2,000 円 + 税 5%)
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



ここ 10 年、研究倫理が社会的に強く求められるようになった。多くの学術雑誌や学会発表においても研究を実施する際の倫理的配慮が求められ、基準を満たさないものは受け付けてもらえなくなった。当初は、「手間が増えたなー」と正直思った。でも所属機関の研究倫理審査会に携わる過程で、研究倫理を考えることは研究を精錬することに他ならないと実感している。本書は、そういった視点で、研究の計画、実施、公表といった進階段階を追いながら、何を大切に、どのように倫理的な配慮をしていけばよいのかがわかりやすく説明されている。研究は対象者に何らかの負担を強いるものなので、情報や資料の収集は成果が得られる最低限に絞るべきである。何が最低限かを考えることは倫理的であるだけでなく、自分の研究の意義を問い直し、「何がわかればよいのか、何を捨てても大丈夫なのか」を突き詰めることになるのでリサーチクエスションの精錬につながる。また著者らが勧めるように研究の実施手順書を作成することは研究の実行可能性を確認する上で役立つ。

本書の「Ⅰ 研究のはじめに」では、研究倫理の基本原則を、「Ⅱ 研究方法と配慮」では、聞き取り調査や症例対照研究などさまざまな研究方法ごとに具体的に配慮しなければならない点が解説される。研究倫理として、インフォームド・コンセン

トの受領や個人情報の保護などの基本原則は理解していても、それをどのように具現化していくのかに頭を悩ますことは多い。当然、研究方法によって配慮すべき点が異なってくる。本書は著者らが 1998 年に始めた、疫学研究のインフォームド・コンセントに関する研究班の長年の活動を基に書かれたもので、痒い所に手が届く実践的な内容が散りばめられている。

●研究倫理の配慮が難しい場合の対応

実際の研究場面においてはインフォームド・コンセントの受領が難しい場合がある。対象者が乳幼児や認知症の高齢者である場合や、すでに死亡してしまった場合などである。また、国が実施している統計調査や、健診データ、診療記録など既存統計資料を利用したい場合にはどうしたらよいのだろうか？ 本書は、そのような場合の考え方や取り扱いについて丁寧に解説してある。

本書は医療研究者全般を対象に書かれたもので疫学研究に関する倫理的配慮に詳しい。さらに、コラムなど随所に看護研究に役立つコメントがあり、研究倫理を学び、これから研究を実施しようとする看護学生や大学院生、研究者にも役立つと思う。研究の初心者にも十分わかりやすい内容であるが、研究方法の解説書ではないので、研究方法の知識を深めながら読み進めるとより効果的に活用できるだろう。